

書 評

藤野寛著 『アドルノ / ホルクハイマーの問題圏
同一性批判の哲学』

（勁草書房、2000年刊）

櫻 本 陽 一

（ 0 ）

フランクフルト学派に関連する研究書は、今や汗牛充棟となっているが、そのような研究状況そのものが、周知のごとく、フランクフルト学派研究がアカデミック・ルーティンの一角を占めるに至るという効果をもたらしている。このような状況の中で、本書は、哲学的思考の最も基本的な経験としての、哲学書を読むことの水準に立ち戻り、著者自身にとっての読むという経験の具体的な在り様を呈示することにより、アドルノ / ホルクハイマーを読むという作業そのものへの、格好の入門書となっている。本書を、とりわけ若い学生諸君が手にすれば、一見すると難解で抽象的と思える哲学書が、いかに現在の社会の痛切な問題、あるいは個人としての私たちに切実な問題に関わりうるのか、そしてそのようなアクチュアリティとの関わりにおいて、哲学書を読むという経験の魅力がいかなるものであるのかに触れることができるはずである。

以下では、まず著者が本書の全体を通してこだわっている「哲学することの意味」という問題を手がかりに、本書全体についての評者の感

想を述べ、次いで個別のいくつかの論点について若干のコメントをしたい。

（ 1 ）

ものを書く人々の思考の態度 実には、それを通じてその人の生のあり方そのものがしばしば見透かされてしまうのだが、そこにおいて、人が本来持たねばならぬはずの矜持を示す書物や論文は、実は、期待されるほどには多くはない。「哲学モドキ」と区別される、本書に言われるところの哲学することは、哲学的概念の構築を通じて、具体的な生の諸経験の中における普遍的なものを明らかにし、他方では、そうして構築された概念そのものの普遍性を絶えず問いただそうとする作業である。これを評者は、むしろ、考えること、知的作業を行なうことそのものの規定であると言ってよいと考えているが、もちろん、先人の手になる様々なテキストについても、このような作業そのものとしての、水準の高さ低さ、深さ浅さといった違いは区別しうるだろう。しかし、アドルノ / ホルクハイマーのテキストは、それらに対して様々な批判がありえ、また彼らの思考の論理そのものにも、時にあえて袋小路に入って行こうとす

るかのような場面が見られるにせよ、以上のような作業の最も徹底した例の一つであることは間違いない。

本書の優れた点は、アドルノ／ホルクハイマーのテキストを手がかりに考える、という作業をまさに行なっている点にある。本書は、アカデミックなアドルノ研究、ホルクハイマー研究、あるいはアドルノ・ファン、ホルクハイマー・ファンを満足させるものではないかもしれない。実際、例えばアドルノが自らの身をその中におかざるを得なかったジレンマをあっさり片づけてしまっているような点もある。アドルノ／ホルクハイマーを手がかりとして考えるということと、アドルノそしてホルクハイマーの思考そのものを深く追体験するということは、それ自体としては矛盾する要求ではないはずだが、いずれにしても容易いことではない。ただし、難解な、そしてラディカルな思考を単に解釈してみせ、それに対して驚愕なり、慨嘆なりをして見せる、あるいはそのような思考に魅惑される自らを告白する、そしてそうすることによって、そのラディカルな思考を、いわば「普通の人々」にとっては縁のないものとして祭り上げ、神話化して囲い込んでしまう、そして同時に、囲い込まれた「信仰財」としての思想を正統に解釈する者として、自らの位置を確保する、そのようなものとしての聖典解釈とは、本書は、全く異なっている。

著者は、アドルノ／ホルクハイマーの前に、考えねばならぬものとしてあった問題に対して、自らの思考によって立ち向かおうとする。徹底的に考え抜くということは、実は、論理を論理として、純化させ、突き詰めるということでは必ずしもない。むしろ論理の水準で突き詰

められていくことに対して抵抗するもの、その具体性に対して、にもかかわらず、論理を手放さず、論理を武器として、取り組もうとすることである。この意味では、本書は、著者がアドルノ／ホルクハイマーと取り組むことによって、ある意味で、自らの思考そのものの限界に突き当たり、そしてそこで苦闘し、その限界を自ら乗り越えて行こうとする過程のドキュメントであると言うことができるのである。

(2)

以下いくつか気が付いた論点について簡単に述べたい。三章および四章での幸福についての議論は、通常はそれほど正面から取り上げられることのない問題であるだけに興味深いが、もう少し個々の論点につき突っ込んだ議論が欲しかった気もする。例えば、第四章の「性愛」についての議論においても「愛」が形而上学としての正体を露呈して退場することになる。あとは、数学的で技術的な行為としての「性」のみが残り、性産業によって商品化され手をかえ品をかえ売りに出される。」(九九頁)という指摘がなされる。しかし、恐らく考えるべきことは、「愛の幻想から眼を覚ますこと」と「商品化」につながるような性の技術化の間の結びつきが必然的なものであるのか、そうでない可能性がありうるのかということであろう。

「啓蒙の弁証法」の問題の立て方に対しても、それを問題そのものに即して批判するのではなくて、それに対して外在的に評価を与えてよしとしている面が散見される気がする。ただし、例えば、アドルノ／ホルクハイマーにおける、批判の基礎、というより、彼らが批判に対して

ポジティブな基礎付けを求めない姿勢についての、「耐え難い苦しみを体験するとき、生ける者が、この苦しみを加えてくる不正を甘受することを肯ぜず、「否」の声をあげるために、すでに積極的で、あるべき正義が前提とされていなければならない、というのは本当だろうか。…苦しみというものに定位するのならば、これを軽減するための運動そのものは…起こり得るのではないか」（一〇四頁）といった著者の指摘は、一見あたりまえのようではあるが、やはり重要である。このような著者の視線は、ホルクハイマー自身に対する、例えば「経験する能力を持った人だった」という評価を通じて、著者の倫理的な姿勢をも表現していると考えられるのである。

抽象的かつ難解な論理の中に、具体的経験と思考の間の格闘へと媒介された、経験の痕跡を読み解こうとする本書において、中心をなしているのはやはり、第五章・第六章であろう。五章では、「ユダヤ人問題」との関わりにおいて、アドルノの思考が照射される。著者によるアドルノの引用を再録しよう。「認識とは、通常は、対象に暴行を加えるという努力なのであるから、そういう通常努力を打破することこそが、認識の主たる努力なのである。自らが対象の周りに織りめぐらしたヴェールを、主体自身が引き裂くような行為においてのみ、対象の認識に迫ることができる。」（一三七～一三八頁）「主体にそれができるのは、ただ不安に囚われることのない受動的な姿勢において、己が経験に安んじて身をゆだねる場合のみである。」（一三九～一四〇頁）六章でもアドルノの『ミニマ・モラリア』の重要な章句が引用される。「認識が拡大されるのは、どこまでも個々の事象に固

執し抜き、こだわりの執拗さのためにその個物の孤立性が崩れ去る場合だけである。もちろんその場合にも、個物の普遍との関係は前提されているのだが、それは包摂の関係ではない。ほとんど逆の関係である。弁証法的媒介とは、より抽象的なものへの遡行を言うのではなく、具体的なもののそれ自体の内部における解体の過程なのである。」（一六四頁）繰り返しになるが、ここにも本書の特長といってよい、抽象的な論理を具体的な場面と連関を持ったものとして読み解くという姿勢が典型的に現れている。そしてとりわけ、抽象的な論理が、自らが具体的なものの中で形成されてきたという事実そのものをまさに隠蔽することによって存立しているということを考えるとき、このような姿勢は、単に抽象的論理と具体的な諸事実を並列させるという水準で語ることはできない、それ自体が自らの経験でもあり、理論的な営為そのものでもある思考の、極めて強固な徹底化に他ならないといえるのである。

ただし、具体的、経験的なことからそのものについての著者の議論は、やや弱いのではないかという感が否めない。多文化主義の問題や、障害者の自立生活を巡る問題にしても、それ自体として極めて重大なこれらの問題の扱い方には、もう少し厚みが欲しい気がすることも確かである。例えば、全身性の身体障害者の自立生活の問題について七章の最後でごく短く触られている。「親による愛情」を拒否して、家から出て、ボランティアの介護者を集めて自立生活を始めたが、正義感や義務感にしたがった介護だけでは満足できず、障害者たちが新たにパートナーを求めるなどして、再び「家族」を作るに至ったとある。本書評で論ずべき事柄とは、

ずれることになるので詳細に論じることはできないが、この著者の見解は、(障害者にとっての介護と日常的な身の回りの人間関係といった)いくつかの問題を区別せずに、また事態を解釈する道具立て、あるいは問題設定に、きめ細さを欠くがゆえに、事態をやや一方的に解釈してしまったものとなっているのではないかと感じられる。“生まれついた”家族と、自覚的に選びなおされる親密な人間関係は、確かに、本質的に異なるとはいえないかもしれない。しかし、具体的な個人の経験においては、実は、時に全く異なった意味を持たざるをえないのである。

抽象的なものと具体的なものを緊張関係の中におこうとすることは、極めて重要である。しかし、具体的なものを巡る議論そのものについても固有の注意を払う必要がある。確かに、この両者をともに十分な形で貫くのは難しい。しかし、そもそも初期フランクフルト学派の批判理論というプロジェクトこそは、両者を包含しようとするものであった。この初期フランクフルト学派の構想を、それ自体としてどのように評価するのか、そのようなプロジェクトが可能になる条件は何なのか等の問いに答えること、あるいは、著者そして評者も含めた我々自身がそのようなプロジェクトの実現を目指していくことは、まさに今後の課題となるであろう。

(さくらもと よういち・本学非常勤講師)